心肺蘇生法に神様は必要か？

「ふぁああ……」

　夜。自室で勉強していた瞬は、大きく伸びをすると同時に大きな欠伸をした。時計に目をやれば、時刻は既に十一時を少し回っている。

　少し休憩しようと、部屋を出たところで、ヘルメスと鉢合わせた。妖精モドキはいない。

　瞬は少し立ち止まる。ヘルメスも立ち止まった。瞬は別にヘルメスに何か用事があったわけではないのだが、それでも立ち止まってしまったのは、きっと、今日の昼休みにあんな話をしたからだろう。こういう時、何かを話すべきなのか、それともスルーして横を通り過ぎるべきなのか、瞬は分からなかった。

　だが、そんな理由とも言えるか分からない理由で立ち止まった瞬とは違い、ヘルメスは瞬に用事があったようだ。

「ね、ねえ瞬」

「あ？　なんだ？」

「今、暇？」

「さっきまで勉強してた。今から休憩するつもりだから、その間だけなら暇だ」

　瞬がそう言うと、ヘルメスは少しホッとしたような表情をっして、それからやや切羽詰まった様子で顔の前で手を合わせる。

「なら、ちょっと勉強教えてもらっていい？　明日、英単語テストがあるって言ってたでしょ？」

「……はぁ？」

　思わずそんな声を出す。瞬にしてみれば、英単語テストなんてものは、ただの暗記でしかない。「勉強を教えてくれ」などとは言っているが、はっきり言って教えることなど何も無かった。単語帳に書かれていることを覚えるだけだ。

「いやー、ちょっと言葉の意味が分かんなくてさ。意味の分からない記号とか、読めない字もあるし」

「読めない字があるって……それでいいのか商売の神様」

「だ、だって、明らかに商売に不要な言葉とか覚えるだけ時間の無駄って言うか……」

「いや、一般教養としてだな……」

　そこまで呟いてから、瞬は言葉を切る。これ以上話をしていても時間の無駄だと思ったからだ。

「まあ取りあえず、リビングで待っていろ。すぐ行くから」

「はーい」

　瞬は、一人と一柱の分の飲み物を持ってから、リビングに向かった。

　翌日のテスト。瞬は問題なかった。ヘルメスが大丈夫かどうかについても、それほど心配もしていなかった。瞬が昨日教えた限りでは、ヘルメスはかなり理解力のある方だったからだ。変な凡ミスでもなければ問題はないだろう。そう思っていたのだが――

「解答欄、まちがえちった！　てへ」

「てへ、じゃねー！」

　本当にそんな凡ミスをするとは思っていなかった瞬は、昼休み、屋上でそう叫ぶ。

「いやー、終わるその瞬間に気がついちゃったからねー、どうしようもないわ」

「こんの……貴様、昨日あれだけ夜遅くまで頑張っていやがったってのに……！」

　そう言いながら、瞬は自分の髪の毛をぐしゃぐしゃと掻き回す。

　瞬はかなり怒っていたが、ヘルメスは少し驚いていた。確かに昨日、瞬が部屋に戻り、寝静まった後、こっそり夜中も勉強を続けていたのだが、それに気がついているとは全く思っていなかった。

　そういうタイプには見えなかったが、もしかすると、心配してくれていたのかもしれない。ヘルメスはそう思った。

「こういうつまらんミスをすると、お前自身の努力が無駄になんだろーが！　どうしてもっと早く解答欄がずれてる事に気がつかなかったんだ！」

　今だって、乱暴な言葉を使ってはいるものの、怒っている内容についてはヘルメス自身の努力を無駄にしてしまったことに対してだけで、昨日瞬が頑張ったのが無駄になった事にに対する文句ではない。

　色々と誤解されやすいが、もしかすると根はいい人なのかもしれないと、ヘルメスはほんの少しだけ思った。

「あのさ、瞬。神様探しのことなんだけど」

　その晩、夕食の最中に、ヘルメスがそう切り出してきた。妖精モドキはヘルメスが今話し出すことを知らなかったようで、ほえー、と言ったような顔でヘルメスを見つめている。瞬は、箸を動かす手を止めて、居住まいを正した。

「まず最初に、探しておきたい神様がいるんだ。ちょっと協力して欲しい」

　瞬はそれを聞いて、少しだけ考える。あてがあるなら、早いところ行動しろと思ったが、すぐにその考えを改める。さっさと行動しないことのメリットが、ヘルメスには無いからだ。

「……話を聞こう」

　だから、瞬は慎重にそう言った。

「ありがとう」

　そう言うと、ヘルメスはコホンと咳払いを一つしてから、改めて話し始める。

「探したいのは、私のお姉ちゃん。あー……姉って言っても、私が勝手にそう言っているだけだけど」

　なるほど、とても仲がいいのだろう。そう瞬は思った。

「でも、瞬の中にいる、ゼウス様にとっては、本当の姉」

「……あー、それって」

　いつか聞いた、仲が良すぎて自立出来るかどうか不安、みたいな話を瞬が思い出そうとしたところで、妖精モドキが首を横に振った。

「あ、違いますよ瞬様。ヘルメス様が探そうとしているのは、ハデス様じゃありません。ゼウス様の、もう一人の姉ですね。なるほど……ヘルメス様は、ポセイドン様を探そうとしているのですか」

「うん。そういうこと。とってもやさしくて温和な神様だし、瞬も気に入ると思うよ？」

「なるほどな。そう言えば、ギリシャ神話でもゼウスとポセイドンって何かつながりがあったっけ」

　きちんと覚えているわけではないが、薄らと記憶には残っていた。

「……まあ気に入るかどうかはともかく、そいつは強いのか？」

　正直なところ、瞬が気になっているのはそこだった。こういっちゃ難だが、戦闘能力の低い神様を救出するだけの余裕は、今の自分たちにはない。そう考えているからだ。

　ただでさえ瞬という足手まといがいるのに、これ以上守らなきゃならない対象が増えてしまっては、ゼウスもヘルメスもやりにくくなってしまう。これでは本末転倒である。

　だが、そんな瞬の不安は、ヘルメスの「大丈夫。私なんかよりずっと強いから」という言葉で払拭された。

「ま、ならいいんじゃないか？　少なくとも今は、出来るだけ戦力を増強させたいところなんだし……ヘルメス達がそれでいいなら、俺からは何も言うことはないな」

「ん。ありがとう」

　ヘルメスのお礼を聞き流して、瞬は食事に戻る。

「…………」

　しかしあれだ。どういうわけか、心なしかウキウキしている。

　ヘルメスが『お姉ちゃん』と言っていたから、間違いなくポセイドンは女性なのだろう。まさか自分は、それで心が躍っているのだろうか……？

　そこまで瞬が考えたところで、瞬は「ああ」と納得した。

　きっと、ポセイドンとゼウスも、とても仲が良かったのだろう。

　そう思って、瞬は自分の胸の辺りを見た。

「……もしかして、ゼウスってシスコンか？」

「え？　そうだよ？」

　ヘルメスが『シスコン』という言葉を知っていることに対して驚くよりも早く、胸の中から蹴り上げられるような痛みを、瞬は感じた。